

No. 2 Bさんが本当に大事にしていること

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 春山理絵
村岡美幸 米本哲也 本間沙織 河原加奈 茂木大介

1. はじめに

障害者支援施設A園で生活している60代のBさんは、50代後半頃より肥満傾向となり、右膝痛を訴えていた。そのため、毎朝、長い棒を頭の上まで持ち上げる運動をしたり、散歩をしたり、医師の指示により食事をコントロールしたりして、減量に取り組んできた。このようなBさんの支援計画は、サービス等利用計画に基づいて個別支援会議を開き、作成していた。支援計画は、Bさんと保護者に説明し、同意を得ていた。

2017（平成29）年3月に通知された「障害福祉サービスの利用等にあたっての意思決定支援ガイドライン」の基本原則において、本人への支援は自己決定の尊重に基づき行うこと、本人の自己決定や意思確認がどうしても困難な場合は、本人をよく知る関係者が集まって様々な情報を把握し、根拠を明確にしながら意思及び選好を推定することが定められている¹⁾。

Bさんの支援計画が自己決定の尊重に基づき行われていたか改めて問い直した時、本人の思いを丁寧に確認することが十分にできていなかったように支援員らは感じていた。その背景には、重度の知的障害と統合失調症があるため、「食事が大好きなBさんに食事のコントロールの話をしたら不穏になってしまうかもしれない」「運動は楽しめていない様子がうかがえるけど、動いてもらわないと、もっと体重が増えてしまうかもしれない、身体を思うように動かせなくなってしまうかもしれない」という支援員側の不安があったためである。

改めて、支援計画作成過程におけるBさんの意思確認が行えるかどうか、また、意思確認が困難な場合に、意思及び選好の推定に至った根拠を明確にすることが必要であると考えられた。

2. 目的

重度の知的障害があるBさんの意思確認が行えるか検証するとともに、意思確認が困難な場合に、意思及び選好を推定する際の根拠を明確にするための方法を検討することを目的とした。

3. 方法

重度の知的障害があるBさんの思いと支援計画の根拠を確認するため、2つの取組みを行った。1つ目は本人参加型の会議の実施、2つ目はICF情報関連表の活用を

行った。

1) 本人参加型会議の実施方法

Bさんは、簡単な言語コミュニケーションが可能であったことから、本人に会議への参加の可否を口頭で確認した。その際、質問者である支援員の言葉を反復する可能性もあったことから、普段、Bさんを支援している支援員2名が同席し、本人の表情等を観察しながら確認を行った。会議出席に対し本人の同意が得られたため、心身の負担を考慮し、月1回、1時間から最大1時間30分、2023年8月～2024年6月にかけて会議を実施した。

Bさん以外の出席者は、支援員、言語聴覚士、管理栄養士、研究者とし、各回6名～8名程度が出席し、会議の進行とBさんへの質問は、研究者が行った。

2) ICF 情報関連表の活用方法

重度の知的障害があるBさんの意思や選好の推定の根拠を明確にする方法として、ICF 情報関連表を活用した。ICF 情報関連表は、ICFの6つの分類である「健康状態」「心身機能・身体構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」からその人の全体像を捉えるための様式で、NPO 法人大阪障害者センターや各地の介護福祉士養成校など障害福祉・高齢福祉の双方で活用されている。ICFの活動の第2レベルを行に、心身機能・身体構造、活動、参加、環境因子、本人の思いを列にそれぞれ記し、相互関係を把握するものである(表1)^{2) 3)}。この表の活用により、ICFの要素の相互関係を俯瞰することで、自らを言語等で表出することが難しい重度の知的障害者の思いを推定することが可能になると考えられた。

具体的な方法は、支援員が1回目の会議までにICF 情報関連表への記入を行い、その後、会議でICF 情報関連表への追記を順次行った。追記の際は、高橋が2003年に開発したインターネット上で、ICFの要素の詳細項目をイラストと共に確認できる「ICF イラストライブラリー」⁴⁾を活用しながら研究者が質問者となり、Bさんや支援員に質問したり、書いてもらったりしながら、Bさんや支援員に無理のない範囲で回答を求めた。

表1 ICF 情報関連表

	身体構造・心身機能	活動	参加	環境因子	個人因子	本人の思い
学習と知識の応用						
一般的な課題と要求						
コミュニケーション						
運動と移動						
セルフケア						
家庭生活						
対人関係						
主要な生活領域						
コミュニティライフ・社会生活・市民生活						
利用者の主観的体験 (心の悩み、現状への不安など)				家族の希望		

4. 結果

表2 8月時点でのICF情報関連表（下線部分が会議で追記した箇所）

	身体状況・心身機能	活動	参加	環境因子	個人因子	本人の思い
学習と知識の応用	・飲食失調店 ・石陰病あり ・不安感あり	・職員と一緒に簡単な会話ができる（話術の習得） ・言葉を覚えている。 ・語を憶える。1日2回にあげると「1週間後」 →1か月で、声出して教えられる →2020年までは手紙を書いていた（郵送が滞った書簡を書く） →前住「おれさん」「おかあさん」書きける →つかひがあるから生活出来る →●（マカ）を飲まされる →フコーストフード店のメニューを覚えていくことができる →料理は家族総動員しているが、自分も頑張って食べない →不十分なことがあると職員に助けを求めることになる →特定の人が部屋に入ってくる時、手をうつてまじまじとながめながらデヴィルに連れていく →寝ている人をみて、他の寮の職員に助けを求めたいことがあった →自分の今後の将来についてある程度決まってきたので、これから何をしたいかを考えることになった	→お前はオレさか？ お前とオレとの違いって何だ？ →おれさんとおを定めて欲しいで言葉を使えなから、本意は伝えない →タムーゾームでの習字体験（3月4日）し、「おれい」「また行く」と笑っている →行儀悪いお客を入れたらとほやであるが、助かるところを持って、お前さんが何を言ってもいい →泣いて	・職員等と話をする場がない - と活動（能力）を発揮することはない →寮の移動駅があったけれど、物が入りこめる場所を確保することができない →「カラダ温かいかな？」 →ドライブスルー外出の不可	・記憶している時、配達係から「足らない」と訴えることもある ・食べている途中で「足りない」と言うこともある	・お前のように外出をしてほしいな食事をした。
一般的な評価と要求	・度計や場面が騒々しい基料、平穏感を不機嫌な表情で表出できる					
コミュニケーション	・言語の理解、発音がわかる ・自分の意思や感情を言葉や表情で表出し、伝達することができる ・フラッシュバックと思われる行動がある	・食間に促される ・趣味な返答をすることがある ・再就職は会話が成立しにくくなる ・費のこと（30年前）のことも覚えていたことがある		・話ができる入所者がいるが、故意に話かけて興奮をおぼせる入所者がいる ・話しかけてくる職員、入所者がいる	・通話機はある間には「お話をいっぱい」と言える	・好きな物を好きにだけ食べたい
運動と移動	・毎日、長歩5分程度の歩法を回復できる体力、運動機能が保たれる	・毎日、お茶の購入のために売店と寮を往復している	・運動的な日常活動には毎回参加している		・足腰はあるが売店までの往復はできる	・身体を動かす事は好きである
セルフケア		・自分の食事を並べたり、ある程度身の回りのことができる		・Aさんの思いを推測し、支援してくれる職員がいる ・声かけや介助をしってくれる職員がいる ・健康状態をサポートしてくれる看護婦がいる		
家庭生活						
対人関係	・飲食失調症（純成型）があり、数になる利用者については病院、奇声をしたりとうまくかわかることが困難。		・ゲストハウスの往復等、一人での行動ができる	→お前が部屋で生きていない。おれさんか！		・裏にならぬや否や他人のかかわりは避けたい（数にならない人であれば一緒に過ごすことができる）
主要な生活領域						
コミュニティライフ・社会生活・市民生活						
利用者の主観的体験 （心の痛み、現状への不安など）				・家族の希望		

— 11 —

会議2回目は、一般的な課題と要求について確認した（表3）。

	身体機能・心身機能	活動	参加	関係図子	個人図子	本人の思い
学習と知識の活用	・視覚失調症 ・右側盲あり ・左側盲あり	・既読と一読に明確な区別ができる（注目の管理） ・言葉を習得している。 ・車を乗る。1日3回にあげる。1回/毎朝 ・10まで、声出して数えられること ・2020年位までは筆を動かしていた（親書が買った言葉を書く） ・右前、「おとうさん」「おかあさん」呼べる ・うらがなは、カタカナはほぼない ・●（マール）を読める ・ファーストフード店のメニューを確認することができる ・地図を定形認識しているが、自ら書く程度は多くない ・中核になることが出来る職業に関するものになる ・特定の人が邪魔に入ってくると、辛そうではないしよしながらディレームに選れていく ・服れている人を見て、他の人の服装に似てをまねにくということがあった ・長期的な味の嗜好があるとかたくさんの中から「これが好き！」という選択ができる	・配膳はできるが、他者の食事との違い（ご飯の量）もあると手を迷く明けて手渡さ伝えるため、配膳は下僚的 ・グループホームでの習俗活動（3月4日）、「楽しい」「また行く」と笑顔でいう ・自転車に乗ることを入居することはできているが、まとまったお金を持って、計画的にならぬ物を買うことは難しい	・風呂等と語るとき場がないと活動（能力）を伸ばすことは正しい ・車の運転免許があればいい物が買える時 ・会を獲得することである（コロナ渦のため） ・ドライブスルー外出のみ可	・配膳している時、配膳後から「足りない！」「添えることもある ・食っている途中で「足りない」と言うこともある	・近頃めように外出をして好きな食べ物を食べた。
一般的な課題と要求	・夜間や両目が暗い時、不快感も不調感も表れる場合がある ・コストが安い良い家の家賃や住宅ローン減税 ・賃貸費	①生活支援サービス利用について ・生活支援サービスを利用するメリット・デメリット ・生活支援サービスの利用方法 ・生活支援サービスの利用料		自分の部屋でパソコン実用	パソコンは扱っている。本人が「やる」と答える。	タブレットは好きかどうか聞くこと。「好き」と答える。出来たっている書き込みでない
コミュニケーション	・自分の意思や感情を言葉や表情で表現し、伝達することが出来る ・フラッシュバックと思われる状態がある	・受けた言葉を返すことができる ・商業時は話が便宜化してくくなる ・意味のと（3年前）のことでも覚えていてことがある		口へ言葉はある人達がいる 話しかけている職員、入居者がいる	ある	
運動と移動	・毎日、商店を往復できる体力、運動施設がある	・毎日、お金の購入のために商店を往復している	・運動的な日甲運動には毎回参加している		・右利きはあるけれども歩道の往復はできる	・身体を動かす事は好きである
セルフケア		・自分の食費を支たり、ある程度の身の回りのことが出来る		・オムツの買い入れ、洗濯してくれる場所がある ・声をかけや助言してくれる風情がある ・健康状態をサポートしてくれる看護師がいる		・洗濯機がつかなくて困る ・何かを買った時に迷惑を受ける。お隣にだけ聞いたら怒られるからどうにかしたい。お隣の話を聞いておくと怒られるからどうにかしたい。お隣の話を聞いておくと怒られるからどうにかしたい。
家族生活						
対人関係	・社交失調症があり、気になると利用者同士は素直、声を出したりとよくかわかることが多い。		・近頃の住環境、一人での行動ができる	・友人輪廻で生活している。トラブルなし。		・気になる人や女性など人とのかわり方は通じた（気にしない人）であれば一緒に過ごすことができる
主要な生活領域						
コミュニケーション・社会生活・市民生活						
利用者の主観的体験 (心の悩み、現状への不安など)				未来の希望		

また、支援員から、Bさんがプットイン活動を楽しめていないのではないかとの話があったため、「プットイン好きですか？」と研究者がBさんに尋ねると、「好き」と答えたが、表情は硬かった。外出や買い物に係わる活動は積極的であったことから、「活動」が嫌なのではなく、プットインをあまり好んでいない様子うかがえた。

ICF 情報関連表の「参加」の欄に書かれた運動の内容や雑誌の購読について、支援員は、「Bさんは楽しんでいないかもしれない」と感じていた。研究者が、会議の中でBさんに、『〇〇〇』（雑誌名）は楽しいですか」「朝の運動は楽しいですか」と口頭で確認したところ、雑誌については「わからない」と、運動については、「毎朝やっている」との返答があった。質問する際、Bさんの研究者に対する返答の信頼性を確

表4 11月時点でのICF情報関連表

また、研究者がBさんに、高齢に伴う身体の変化のひとつに、口唇を閉じる力や嚙む、飲むといった力が弱くなり、口から物を食べられなくなる人もいること、口から食べられなくなった場合に、胃に直接栄養を入れる人もいることを伝えると、「こわいな」「いやだな」「口から食べたい」という発言が聞かれた。このほか、自動販売機でブラックの缶コーヒーを買って飲むことに対しては、「楽しい」と言っていた。しかし、その一方で、本当はチョコレートを買いたいのを我慢していることもわかった。

さらに、食事コントロールと運動により、体重が少しずつ減っていることをBさんに伝えると、笑顔で「膝が痛くなくなった。軽くなった。よかった。」と答えた。

5. 考察

本研究は、Bさんの意思確認が行えるか検証するとともに、意思確認が困難な場合に、意思及び選好を推定する際の根拠を明確にするための方法を検討することを目的に行った。

1) Bさんの思いを確認することは可能なかどうか

Bさんの思いは、発言、表情、身体の動き等により表出されていたが、本当の気持ちかどうか悩む場面があった。Bさんの思いを確認することは困難ではないものの、「間違いがない思いか」と言われると絶対とは言い切れないことから、推定の根拠を明確にすることも必要であると考えられた。また、会議の場においてBさんの参加がない時よりも、参加している時の方が支援員らは慎重かつ丁寧に意思を推定していたことから、Bさんに無理のない範囲で会議に同席してもらうほうがよいと考えられた。ただ、その場合に、Bさんにとって負担とならない適切な会議時間や環境の設定、意思の確認方法が必要であることもうかがえた。Bさんは、口頭では「会議、行く」と笑顔で答えていたが、会議前に「会議」と大きな声で発しながら落ち着かない様子を見せることもあった。「新しい取り組み」による負担が「習慣」となり負担を感じなくなるよう、また、Bさんにとって理解しやすく楽しい時間となるよう、言語コミュニケーション以外の確認方法も検討しながら、よりよい意思確認の方法と会議のあり方を検討していくことが必要であると考えられた。

2) どのようにして根拠を明確にしながら意思及び選好を推定するのか

本研究では、ICF 情報関連表を活用した。ICF 情報関連表で本人の状態を俯瞰することで見えてくる本人の思いがあった。Bさんは、食事や運動に関する記載が多く見られた。また、季節によって食べたい物が異なることもわかった。ICF 情報関連表を活用し、質問の幅が増えたことで、話題が広がり、「食べることが好き」だけでなく、「夏は冷やし中華、冬は焼き芋が食べたい」とか、「せんべいは堅いから嫌だけど、ドーナツやカステラは軟らかくて好き」という情報が得られた。

以上より、ICF 情報関連表は、より具体的にアセスメントでき、意思や選好を推定する際の根拠となると考えられた。

6. おわりに

ICF の視点で定期的に支援会議を行い、これまで拾い切れていなかった情報に気づく。新たに気づいた情報を参考にしながら支援を検討し、計画の立案と実施、振り返りを行う。この過程を繰り返すことで、その人が「本当に大事にしていること」に気づくことができる。Bさんは、これまで好みの雑誌を見つけるため、時折種類を変えて雑誌を購読していた。しかし、「物が届くこと」を楽しみにしているのであれば、Bさんが好きな高級パンや洋菓子等を定期便で取るのもよいのかもしれない。

ICF の視点は、多くの気づきと生活を豊かにするためのアイデアを生み出す契機と

なることから、多くの支援現場で活用されることを期待したい。

文献

- 1) 厚生労働省 社会・援護局: 障害福祉サービスの利用等に当たっての意思決定支援ガイドラインについて, 4-5, 2021 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000159854.pdf>
(閲覧日 2024 年 6 月 26 日)
- 2) NPO 大阪障害者センター: ICF を活用した介護過程と個別支援計画, 47, 2019
- 3) 佐藤 裕子・木村 弘子: 介護過程の展開の理解に向けた取り組み～ICF に基づくアセスメントシートを使用した介護過程の実践～, 甲子園短期大学紀要, 41, 54-64. 2023.